

博士論文審査書

(課程博士 論文博士)

論文名	日本における「ハーメルンの笛吹き男」の受容			
	(英文タイトル) Reception of "The Pied Piper of Hameln" in Japan			
学生番号	95321001	氏名	蚊野千尋	
所見	別紙、「論文内容の要旨および審査結果の要旨」のとおり			
審査結果	可	否	学位記番号	第 17 号
主査	野口芳子		副査	
副査	村山功光		副査	
副査	田中裕之		副査	
論文提出日	論文審査日	公聴会	可否決定日	博士学位授与日
2021年6月28日	2021年7月31日	2021年8月21日	2021年9月15日	2021年9月25日

論文内容の要旨および審査結果の要旨

この論文は明治期から平成期まで日本で出版された「ハーメルンの笛吹き男」について、紙ベースの資料すべてについて調査した意欲的な論文である。グリム童話についての受容研究は存在するが、ドイツ伝説についての受容研究は皆無である。したがって、この論文が最初のものということになる。

明治期から平成期まで合計 145 話の資料を収集し、改変されているものに焦点を当てながら、改変理由を時代背景のなかから探り出そうとしている。「ハーメルンの笛吹き男」はドイツの伝説であり、グリム兄弟により収集されたものであるにもかかわらず、日本で主として普及しているのはブラウニングの英語版である。最初の邦訳は明治期のドイツ語教科書の翻訳版で、グリム兄弟版の話が収められている。しかし、これはドイツ語学習者にも受容されたもので、一般に普及することはなかった。大正期に入ると子ども向けの雑誌に収録されるが、内容はブラウニング版になる。昭和期になると、戦中の話は子どもが無事帰って来る話に変更され、戦後は笛吹き男が子どもを連れ去る話に戻される。報復のために子どもを連れ去るのではなく、約束を守らない大人の下では悪影響を受けるからである。高度成長期になると「子どもは大切である」という言葉が続出する。子どもが誘拐されたことに対する反応が、父親と母親により異なるとされるのはこの頃である。つまり、ジェンダーにより異なる行動が規範化された時期なのである。平成期になると物語集という形で簡略化された話が収録される。母と子の「読み聞かせ」という形で受容され、母子の話合いが推奨される。母子関係を濃厚なものにして、子どもの躰に尽力すべきという国の方針が、反映されたものである。

グリム版やラング版ではなくブラウニング版が主として受容されたのは、子どもに対する教訓と、消えた子どもたちは楽園に行ったという夢のある結末からであろう。グリム版とラング版は山腹に入ったまま子どもたちは消えて話が終わり、教訓の付加もない。

明治期のみグリム版に忠実な訳で受容されたが、大正期以降は児童書で主としてブラウニング版で受容されていく。内容は時代により改変されており、とくに学校劇の脚本では大幅に改変されている。笛吹き男は報酬を払わない市長を擁護し、市民に責めないよう頼む善人とされていく。

最初の訳者、中村道四郎の素性は不明であったが、それを突き止めたのは立派である。明治期の辞書の誤記から訳者が使用した辞書の確定、明治大正期のドイツ語教科書の調査、時代背景の詳細な調査など、文献調査が徹底していて褒めるべき点が多くある博論である。それだけにケアレスミスが存在が残念である。注番号と話番号のずれ、昭和から西暦への変換ミスなどである。今後の課題は、挿絵と画家についての分析、著作権の法制化以前と以後の訳文比較などであろう。また提出前に論文を何度も読み返して、注や話の番号のずれがないよう細心の注意を払うことも今後の課題と言える。

全体的に見て、この論文は博士論文としての合格水準に充分達しているものと判断する。

外部副査の村山功光先生の評価を要約すると下記のようなになる。明治から平成までの受容を網羅している点は非常に評価できる。改変されている理由を社会的背景から説明しているが、あまりにも一致しすぎているところが気になる。一致しないものも取り上げて説明するともっと説得力が増すように思う。

内部副査の田中裕之先生の評価を要約すると下記のようになる。フランス語のマレル版についてももう少し詳しい説明がほしい。グリム版、ブラウニング版、ラング版のあらすじが短すぎたので、もう少し詳しく書いてほしい。調査の結果、145話も邦訳本を見つけたことは立派だと思う。

両副査とも明治期から平成期までに日本で出版された「ハーメルンの笛吹き男」を145話も見つけたことは立派であると評価されている。主査は、それぞれの改変箇所を時代や社会の背景の中で考察している点を特に評価している。ジェンダーの視点からの考察も加わり、文学だけでなく、社会学、歴史学、ジェンダー学の視点からの考察もある興味深い博士論文であると評価する。

主査：野口芳子